毎月一回15日発行 昭和52年 1月15日発行・第84号（昭和45年9月4日第三種郵便物認可）

リベルテール

1月号

Libertaire VoL, VIII. No. 2

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和52年1月15日発行第84号
リベルテール 定価100円（郵便料共）

人類更生の大道アナキズム研究書

何が私をこうさせたか 金子ふみ子獄中手記決定版		2,400円
解説：瀬戸内晴美	金子ふみ子歌集	500円
権藤成郷著作集2	農村自救論・日本農制史談	3,000円
大杉栄秘録 増補	堀保子ほか19氏著	1,000円
無政府主義論	エンリコ．マラテスタ著	300円
ディナミック	石川三四郎個人紙復刻版	3,000円
アナキスト革命	ジョージ．パレット著	150円
西洋社会主義運動史	石川三四郎著	1,000円
ロシア革命の批判	Aベルクマン著	200円
黒色青年	黒色青年連盟機関紙 大正15年創刊号より昭和6年終刊号まで復刻	2,500円
黒色戦線	アナキズム文芸思想誌 第1次 昭和4年創刊号より終刊号まで復刻	5,000円
労働運動第5次昭和2年復刊号より終刊号復刻		〈近 刊〉
差別とアナキズム・水平社運動と アナ・ボル抗争史	宮崎晃著	1,600円
君民共治論	権藤成郷著作集第3巻	3,000円
無支配への道	マラテスタ著作集1	300円
アナキズムのABC	ベルクマン著	100円
古事記神話の新研究	石川三四郎選集1	2,200円

〈解説・石川三四郎論 大沢正道〉

〒372 群馬県伊勢崎市中町和田 電0270-24-0776
郵便振替口座 宇都宮 11015 黒色戦線社 大島英三郎
東京事務所 電03-735-1246
〒144 東京都大田区西蒲田7丁目61番8号エンリコビル4階
国鉄蒲田駅西口下車，蒲田銀座アーケード街歩いて5分突き当り左隣，毎月第2，第4日曜午後1時より4時共学読書会，初心者に公開
販売書店 東京，神田ウニタ・新宿模索舎・吉祥寺ウニタ・早稲田文献堂．京都，中・寺町二条上・三月書房

■ リベルテール Le Libertaire
■ 1977年 1月15日 発行 VoL, VII . No. 2
■ 編集兼発行者 三浦精一
■ 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替 東京133830番 三浦精一

今月のことば

〔一九七七年初頭72才巳年の年男
杉藤二郎の歌える〕

この春は　おれの年ではあるけれど
病めるこの身に　たのしみはなし

〔北富士自衛隊演習場は祖先伝来の
農民の入合地だ　小島康彦〕

われらの大地　北富士の野に砲敷きて
弾打つ兵ら　帰れ！　帰れ！

〔向う三年のエト（干支）を歌い込んだ版画
をご恵贈して下さった中島康允さんの歌〕

びんぱつに霜のみかはやまらさえも
たたず　虞よ　虞よ　みをいかにせむ

天かけるうまよりほかに類なしと
ほこれるまらよ　おとろえしかな

わがまらのたたずなるとも牧のひつじ
官犬めにおわれて　したがうべしや

〔エスペランチストから〈まら〉とは何かと
訊ねられ……莫空人の詠める〕

君知るや　まらは男子の逸物で
コルデイ嬢にぞ　打取られし「マラ」を

（Maratはフランス大革命時の民衆派領袖。狂信的愛国者シャルロット・コルデイ嬢により面会した浴室で刺殺された。）

巻　頭　言
花の高校三人娘
―または女の友情について―　……1
クロポトキンの相互扶助論　三浦精一　……2
無政府という訳語について　若山健二　……6
水沼熊氏の面影　ハギシン　……8
一　波　万　波
（中沢さん、守田さん、太田さん、
江川さんより）　……10
海　外　だ　よ　り
―海外誌にみる毛沢東―　……13
表紙絵他―中島康允さん投稿

―合本ができました―

「リベルテール Vol Ⅶ 第一号から第12号までの合本ができました。小部数ですがご希望の方におわけします。

定価一二〇〇円

巻頭言

花の高校三人娘
―または女の友情について―

正月二日は留守中のわが家にシヴルサービスの警察官一名のご来訪を受け、老母に留守中の心得を説かれ、年賀先の私宛てには確認の意味の電話を受けました。もっともこの方は私が受話器を執ると切れていましたので、すべて間違い電話ということで納りました。私には宮城参賀の趣味はないのですが、たまたま（あとで知ったのですが）この日がそれと重なり、またパチンコや発煙筒で騒がれてはとのご配慮かと推察する次第です。

それにしても三ヶ日はお天気がよろしく、安酒のうちのいいものを一瓶とパイプ煙草をたしなみ、ゆるゆると過ごさせて貰っています。テレビは子供達にチャンネル権があり、朝から歌謡曲で、三日目は花の高校トリオ、百恵ちゃん、淳子ちゃん、昌子ちゃんの高校卒業による三人それぞれの門出と決意表明、それに変らぬ友情の誓いをみせて貰いました。受けた印象から言うと歌唱力は昌子ちゃん、舞台での衣裳替えの早さをみせる演技力の初歩を身につけた淳子ちゃん、それに素直な百恵ちゃんは現在の政治状勢にあてはめると、それぞれ中国、米国、日本の三極（トリオ）になるでしょうか。ジャーナリズムではこれが色々に変奏され、米・中・ソ　米・欧・日　米・ソ・日などで語られています。もともという数字はピタゴラス以来人類の愛好する数字で、幸福や繁栄を呼ぶものと思われてきました。例えばギリシアでは地・水・火（三元素）、フランス大革命の合言葉は誰でも知っている〈自由・平等・博愛〉の三語ですし、キリスト教のシンボルの十字架は三方向即ち三位一体の象徴であり、また最近の資料によればアナーキズムの三本の柱は〈直接行動、自主管理、連合主義〉だそうです。これでみると弁証法の三過程も含めて、トリオのろは多かれ少かれ私達の感性に訴え、思考を規定しやすい枠組なのでしょう。もともと枠組と言うのは捕えどころのない様態に対し、一定の方向性なり、意味づけ―価値の設定をするものですが、一度これが確定すると不動のものように錯覚するのも私達の通弊のようです。ところでアナーキーとはそうした既成の意味付け―価値を認め得ないで、むしろそれを解体させようとする限りでニヒリズムに近親なのですが、本来のアナーキズムは先にあげた三本の柱のような別な秩序体系を持つことによって、一つの社会主義体制であり、それこそ秩序の友でもある訳です。だが気骨のある人びとにとってはニヒルである不確定の部分が苦しくとも楽しく、太陽系に統合されない〈ガス状の未だ凝集して冷却し形を整えていない〉不定形の地球こそ生甲斐だというのです。それはまさしく精神の、感性の冒険であり、本題の三女性の友情と同じく続くようで続かないようで、あるようでないようで、奇麗で汚い祝祭でしょう。（はしもと）

クロポトキンの相互扶助論

三浦　精一

リベルテールのサロンを水道橋のコージから、新宿区三光町14東晃ビル、月の輪出版に移し、毎月最初の火曜日を読書会とすることにした。その第一回読書会（一九七六年12月7日に、僕は相互扶助論の序論をとり上げた。読書会では順次に一人が一章づつをとり上げて、自由に意見を述べる。こうして質疑応答を重ねて約十ヶ月かける予定である。

マルクスやレーニンの著書は共産主義者にとっては金科玉条であり、神聖にして犯すべからざる聖典であり、その解釈をめぐって党派の分裂も起るが、リベルテールにはそんな聖典はない。バクやクロが十九世紀思潮の影響下に多くの著述を残したのであり、僕等はそれに新しい光をあて、それを把え返すということが残されているのである。

以下にその第一回読書会で話したことの大要に加筆して書くことにする。テキストには大沢正道訳（三一書房）のものを使用する。

×

相互扶助論の初版が出たのは一九〇二年で僕の生れた年である。大沢が使用した底本は一九五五年版の Extending Horizons Books からと書かれている。これには一九一四年十一月二十四日付のクロポトキンの序文もついているから、多分一九一五年の普及版が採録されているのであろう。僕が持っているのはその普及版の一九一九年版のものである。

相互扶助論は序論の終りの方に書かれているように、イギリスの「十九世紀」誌に、一八九〇年の九月以後に発表された一連の論文をまとめたものである。

日本で大杉訳のものが出たのは一九一七年で、一九二八年には室伏高信訳のものが、世界大思想全集の中の一巻として、田園工場仕事場、近代科学と無政府主義と一緒になっている。

クロポトキンは、一八六二年に近待学校を卒業し、学友たちが胸ふくらませて栄達の道を進もうとする中で、父の意に叛き、期待してくれた先生を悲しませて、一人シベリアのアムール・コサックに志願してセントペテルスブルグ（後のレニングラード）を去った。

このシベリアでの勤務の間に自然を観察したり、未踏の地を探険した。こうした実地の観察から、彼が理解したことは「過剰繁殖に対する自然の制御」が、圧倒的に重要であり、それに比べれば、生存手段をめぐって同一

の種の各個体が行なう闘いなどは、そこである程度に行なわれているにしても、物の数ではないということを知り、相互扶助と相互支持こそは、生物の持続、それぞれの種の保存、そしてその進化にとって、もっとも重要であるということを知ったのである。

一八六七年に、セントペテルスブルグに帰り、大学に入り、物理・数学科で学んだ。数学の勉強のかたわら、近待学校、そしてシベリア以来の地理学の研究も続けた。この時に発表した探険の報告書によって、その頃まで想像によってつくられていたシベリアの地図が、科学的基礎を得て書きかえられた。

ロシア地理学協会の自然地理学部門を受持って大きな学問的業績を残し、後に地理学協会の会長としてフインランドの調査に赴いたが、地下活動に関係していたために捕えられて投獄され、脱出してヨーロッパを流浪することになった。

進化の要因としての相互扶助の事実についての資料を集めはじめたのは、一八八三年以来のことで、セントペテルスブルグにおいてであった。

序論の中でも言っているように、セントペテルスブルグ大学の学長だった動物学者ケスラー教授が、一八八〇年に「相互扶助の法則について」という講演を行ない、自然界には相互抗争の法則とならんで相互扶助の法則があり、相互扶助の法則は、生存闘争の勝利にとって、とりわけ種の前進的進化にとって、相互抗争の法則よりもはるかに重要であると、ダーウィン自身が、その「人間の由来」の中で明らかにしたことを、さらに発展させたことによるのである。

クロポトキンの中に、このようにロシアに居た頃から貯えられたものが、その頃、進化論学者として有名だったハックスリーが、その生存競争宣言の中で、生存競争や適者生存を弱肉強食の意味に曲解して説いたために、ダーウィン説擁護のために、「自然の法則であり、また進化の一要因としての相互扶助」として発表されることになったのである。

「進化」というとき、この言葉は、数学における進化とか、天体や宇宙の進化などと、いろいろな意味に用いられるが、ここでは有機的な種の進化の意味に用いられている。しかし、ダーウィンの時代には、細胞学、発生学、遺伝学などは未だ発達していなかった。だからダーウィンが考え、クロポトキンが擁護した意味での進化の概念には、吟味し付加すべきものがあるに違いないと思うのである。ダーウィニズムは今もネオダーウィニズムとして生き続けている。こうした新しい立場からクロポ

トキンの相互扶助論に光をあてて欲しいというのが僕の願いである。

さらに重要だと思われるのは、クロポトキンが「相互扶助は道徳本能が人間以前に起源するものとして論ぜられるばかりでなく、自然の法則、進化の要因として考えられるものであり」と序論の中で言い、愛と個人的同情よりも無限に広い感情、気が遠くなるような長い進化の過程で、動物や人間の中でゆっくり発達して来た本能として、人間的連帯性と社交性の感情、もしくは本能を主張しこれを相互扶助として捕えていることである。愛と個人的同情を基礎とした倫理を、全体としての道徳感情をせばめるものとして否定し、本能としての人間的連帯性と社交性の感情を持って来るのである。倫理の基礎を愛や個人的同情以前の人間的連帯性や社交性の感情にさかのぼらせることには異存はないが、これを本能と名ずけることは安易過ぎはしないだろうか。

本能はこの場合、環境からの一定の刺戟に先天的、自動的に反応する動物の行動として考えられている。そして本能と言えば先天的に考えられて、何か知らすぐ分ったような気になりやすいが、どこまでが本能と言えるかとなると大きな問題である。たとえば「本能的にブレーキをふんだ」といった場合、ブレーキをふむ行為は学習の結果であり、僕のように車の運転を知らない者には、どれがブレーキかさえ分らないし、トッサの場合にふむこともできはしない。

現在では行動というものが非常に複雑な要素を含んでいることが認められ、ある行動を純粋に自発的な行動、純粋に反動的、反射的な行動と、そう簡単に区別できない。したがって本能という言葉の意味も限定的にしか使用されないのが現実である。常識的には本能と言われていても、その中には模倣や学習によるものが含まれている。だから「道徳本能」と簡単に言えば、その意味は考えることができるが、実際には不明確なものに相互扶助の基礎を求めていることになりかねない。こうした所にも、感情、あるいは人間の行動というものにさかのぼってさらに科学的な基礎に立つことが要請されるのである。

ということは、生物学にしても、心理学にしても、社会学にしても、非常に水準が高くなっているということである。こうした意味で、石川さんが言った「アナルシズムとは偏見を持たないということだ」という言葉が生きる。十九世紀的水準で書かれたクロポトキンのものを、現在の学問の水準から捕え返す作業が常に行われねばならないのである。ということは「実在する相互扶助にさらに明確な理論的基礎をあたえる」ということである。

科学的に、歴史的に、哲学的に跡づけて行く作業が行なわれねばならないということである。

×

第三章は「野蛮人間の相互扶助」、第四章は「未開人間の相互扶助」と訳されている。これは英語ではそれぞれMutual aid among savages および Mutual aid among Barbariansである。室伏訳では第三章が未開人間の相互扶助、第四章が野蛮人間の相互扶助となっている。どちらも間違いではない。クロポトキンが段階的に使用した言葉だが、日本語では、どういう風にその段階を表現するかである。大杉は第三章に蒙昧人、第四章に野蛮人をあてている。今では文化人類学ではこんなSavages とかBarbarians とかの語は使われない。クロポトキンの時代のアリアン人優位の中華思想的表現である。クロポトキン自身がそんな中華思想は持っていなかったのだが、その時代の用語を使っているのである。現在は「未開発国」を「開発途上国」と言い直さねばならない時代である。それに未開とか野蛮とか言われて来た人々の間の道徳が、いわゆる先進国よりもはるかに高い事実すら知られている。これについて、梅棹忠夫氏の「狩猟と遊牧の問」に次のようなことが書かれている。

「一般によくいわれるかんがえ方としては、われわれの物質生活はこんなに進歩したのに、精神はいっこうに進歩しない、いまだに未開民族とおなじじゃないかという、やや自嘲的なかんがえ方があります。しかしこのかんがえ方は、どうもさかだちしているようにおもうのです。ほんとうは、精神のほうは、大昔から展開して、はやくりっぱなものになっていた。にもかかわらず、それがいっこうにつかいみちもなくて、サブシステンスのほうはさっぱりよくならなかった。知恵をはたらかせて精神がいくらか物質生活の向上に役立つようになって来たのは、ごく最近のことなのだ。そういうことだとおもうのであります。精神みたいなものは、いわばはじめからあった先祖ゆずりのもので、物質生活の発展こそは、後世の人間を人間たらしめている特徴であるということになりましょう。」

原始人とか、野蛮人とか、未開人とかいわれて来た人たちも、われわれとともに何万年の文化を持っているということが、現代の文化人類学での常識である。その人たちの道徳をつらぬくもの、そこに「相互扶助」が事実として存在する。この存在する事実を、現代の発達した社会心理学の面からも、人間行動の一環として、どこまで理論づけることができるだろうか。

そして、くれぐれもよく知っておかねばならないこと

は、相互扶助は事実であり、人間の場合、善人だけが相互扶助するのではなく、悪人も資本家も官僚も、やくざも、皆相互扶助をするのだということだ。ドン底の庶民の相互扶助を勝ち遂げしめるのが革命なのだ。

無政府という訳語について

若山　健二

アナーキーを無政府と訳すのは定訳であろうが、近年は原語をそのまま使用する例が多くなっているようである。日本語になおしにくい言葉であり、無政府では語感がかなりズレルと思うので、無政府という訳語には賛同しかねる。無政府よりも無支配なり脱国家なりの方が原義を伝えるであろう。アナーキーに無政府とは異なる別の訳語があてはめられていたなら、日本のアナキズムの歴史はややちがった軌跡をたどっていたことであろう。無政府という言葉はアナーキーという原語が輸入される以前からあったかもしれないが、アナーキーに無政府という日本語をあてはめた、あるいは新たに製造したのは誰であろうか。

今のところ確定しかねるが、いくつかの可能性だけは指摘できる。但し、この小文からいくらか推測されるように以下の三つの可能性はきわめて小さい。

第一に、同志社のラーネッド博士の門下生である。住谷悦治『ラーネッド博士』から判断してその可能性はきわめて少ないが、同博士が教壇からアナキズムを説いた最初の学者であり、従って、その門下生がアナキズムに触れた最初の日本人であったことはたしかであるようだ。

第二がスペンサーの著述の翻訳者とその周辺である。明治一〇年代前半のスペンサー・ラッシュ（清水幾太郎氏）のなかで、無政府という言葉がつくられたわずかの可能性がある。スペンサーの著述のなかにあるかもしれないアナーキーあるいはアナキズムに該当する日本語はどのようになっていたであろうか。

第三が虚無党文学関係であるが、この関係でアナキズムには虚無党という定訳めいたものが与えられていたのではないだろうか。バクーニンやマルクスの名前を最初に日本に伝えた小崎弘道の論文「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」（明治一四年）には虚無党という用語があり、この論文は後に邦訳されるウールセイの著書を元にしたものと言われているが、この著書（原書も訳書も）は未見なので断定できかねるけれども、どうやら小崎論文のなかの虚無党はアナキズムまたはアナキストの訳語であるらしい。

それ以外の可能性としてはいろいろあろうが、無政府

という表記法からして、また、ふつうであれば未知の単語「アナーキー」から無政府という意味を吸収する以前に無支配という意味を考えるであろうことからして官憲側がつくったとも考えられないことはない。以上のようなことを想像して行くと、創造されたであろう明治一〇年代の著述が簡単に参照できないこともあって誰が最初に使用したかを確定することはとてつもなく困難である。しかし、限りなくその「誰」に近づくことは比較的容易である。

私の知るかぎり、無政府という用語を最も早く使ったのは益田克徳で、彼はある演説のなかで政府のないという意味で無政府を次のように否定的に使用している。「租税ノ賊ヲ戴キテ無政府ノ下ニ栖息スル人民の憂苦艱難」「無政府ノ災」「無政府ノ惨状」という具合であって、全体の調子からしてアナキズムとは全く関係なく使用されている。この演説は遅くとも明治一四年前半には行なわれているが、今のところ正確な日付は特定できない。益田克徳は慶応義塾出身の法律家、のち実業家で、福沢諭吉の甥の益田孝（三井財閥創業）の弟である。益田が上のような文脈のなかで無政府を使用したことは、当時アナーキーは無政府と訳されていなかったことを立証するように思う。

「虚無」から「無政府」へ移行する中間の訳語として「無政党」がある。ヘイマーケット事件の約一カ月後に同事件を報じた福沢諭吉の『時事新報』の記事のなかに「無政党」という用語が三回見えるのであって、何の注釈もなく使用されているところからして、当時の一応の定訳とはいえないにしても散見された訳語ではないだろうか。いわく「同じ頃シカゴ府にても無政党等が赤旗を押し立て……暴民等は警吏の中にダイナマイト破裂弾数ヶを投げ入れ……」(※)。この記述が文脈からしてヘイマーケット事件であることはまちがいないし、「有名なる無政党員モースト」とあるところから、アナキストが無政党員と訳されたことが判然とする。

当時の著書、新聞・雑誌をていねいに見て行くと他の訳語があるかもしれないが、明治もかなり遅くまで、「虚無党」と「無政府」が混用され、「虚無」と「無政府」、「党（員）」と「主義（者）」が混用されていたらしいことは後注の酒井の論文や有名な煙山専太郎の著書、その他から推定される。新聞は時流に敏感でも独創性はあまりないから、察するに、アナーキーに無政府という訳語が充当され、それが一般化されたのは、『時事新報』がヘイマーケット事件を報じた明治一九年六月三日から、『国民新聞』がバクーニン来日を報じた明治二四年一一

月六日の間ではないだろうか。住谷氏によると社会主義は明治二一年に初めて使用されたとされるが、酒井論文では社会党と社会主義が併用されているのに無政府主義という用語は使われていないのであって、無政府、無政府主義（者）という訳語に統一されるようになったのは明治末期であろう。

※　同記事のなかにはアメリカのメーデーの報道がある。ふつう、メーデーを最初に紹介したのは徳富蘇峰の『国民の友』に掲載された酒井雄三郎の論文ということにされているが（石川三四郎氏もその一人）、地域を問わずメーデーの紹介となればこの記事が最初であろうか。ヘイマーケット事件について付言しておくと、同事件の現地を九〇年後に訪れた日本の一アナキストの記事がリベルテール八月号に発表されている。なお酒井がメーデーを日本へ最初に伝えたのではないことを右記から知られるが、おそらく彼が日本へ最初に（明治二四年）伝えた事実がある。バクーニンの来日である。『国民新聞』に連載された論文のなかで伝えたのであるが、参考までにバクーニンの名前が登場する箇所を一つだけ引用しておく。引用では省略したが全三箇所ともマルクスとの対比において叙述している。「彼の虚無党の首魁、無政府の領袖にして、其足一たび我が日本の地を踐みたりし露国の亡命ミセール、バックーニーヌが始めて社会党会議に列して、頓に其名声を博し…」。酒井がどうやってバクーニン来日を知ったのかは興味あるところだが、本稿の主題からは逸脱しすぎる。

水沼熊氏の面影

ハギシン

一九〇二年四月一〇日、栃木県今市町（現日光市）に生まれた。寅年なのに、なぜか熊と名づけられた。父徳三郎は、木炭地見士兼製材業であった。

熊は公衆浴場をしている叔父只次郎の養子となり、東京職工学校機械科を卒業した。

一八年ごろ、兄の辰（辰夫）の紹介で北風会に入った。当時のおもなメンバーは、大杉栄・和田久太郎・斎藤兼次郎、野沢重吉・橋浦時雄・村木源次郎・百瀬晋・渡辺政太郎・近藤憲二らで、このほか数十人の労働者や学生が集まっていた。

二二年、熊は徴兵検査通知を無視して、高尾平兵衛・秀島秀二・渡辺幸平・白銀東太郎・長山直厚らとロシヤに渡り、チタで反戦運動した。靴はそのままモスクワに行き、共産労働大学に入った。

二三年九月一日、関東大震災がおこった。彼は露助に「富士山が崩れ、東京湾が泥で埋まって平地になった奈良の大仏もどこかへ吹っ飛んだ。レーニン号が食料や衣類や医薬品を積んで救援に向った。今こそ絶好のチャンスだ。お前らはすぐ日本に帰って革命をおこせ」といわれて、帰国の途についた。

ソ連に行った連中はみなボルに転向したが、熊だけはボルを正しく批判し、終生節を曲げなかった。

二六年一月、黒色青年同盟が結成され、彼は機関紙『黒色青年』の一号から五号まで（四月～九月）、編集発行人となって活動した。同年五月二四日、全国労働組合自由連合会が結成された。この時の議長は水沼辰である。

翌年一一月、第二回大会が開かれ、熊が議長になった。

全国自連は、機関紙『自由連合新聞』を発行していた。

ある日、ソ連大使館から、購入したいと英文の手紙がきた。京橋木挽町事務所の一階に住んでいた延島英一は英語はペラペラだが、「俺たちが何も英語で返事を出す必要はねえ」と放っておいた。すると、改めて日本語の手紙がきた。山鹿泰治は熊を通訳につれて大使館に出かけた。

「カカアヤ・パドビスナアヤ（購読料は一か月幾らか）」と聞く。

「ジェーシャチ・トウーイシャチ・エン（一万円）」

露助は目をむいておどろいた。

「オウ・スリーシコム・ドーロゴ（高すぎるぞ）」

「労働者にならタダでもやるんだ。ザマ見やがれ」

二人は冷笑して引きあげた。

のち、熊は生活に追われ、東京一般労組を離れて、吉田一の自転車製造を手伝った。そして二、三年後に独立して、市ケ谷の士官学校近くに自転車店を開いた。だが商売はおもわしくなく、三六年に、長兄真澄の働く東大機械工学実験所に勤めた。

四〇年ごろは、富士工業（自動車パーツ製造）の製造主任をしていた。

敗戦直後の混乱期には、渋谷駅前で吉田一のシチュー屋を手伝ったりした。

数年前まで働きながら、職場の若い者達にアナキズムの話をしていたが、辞めてから体が急に弱った。それでも、娘に露和辞典を買ってこさせて、読んでいた。

私は高尾平兵衛や吉田一の話を聞きに、八千代市と千葉市の家を訪ねたが、彼の記憶のくわしい事と正確な事に舌を巻いた。（脱線するが、私は何人かの先輩同志の聞き書きをしてきた。だが事件や会合の月日、場所、人名に記憶違いが多いのでガッカリした事が何度もある。

大杉を会合や演説会で見た事はあっても、口を聞いた事もないのに「親交があった」「こういわれた」と講釈師まがいに言ったり書いたりする人達もいた。居合せなかった所に参加したようにいう人達もいた。こうありたかったという願望が、追想錯誤に陥らせるのか。或いは自己顕示欲のなす嘘か。また、ある人の資料を利用したら、「それは絶対に間違っている。俺はそんな事を書いたおぼえはない」と、自らの言った事、書いた事を否定された。ことほど左様に、歴史の聞き書きには眉唾の恐れが多い。それだけに水沼の記憶力に感嘆したのだ。大昔の語り部の存在がここに生きていたとさえ思われた）

二年ぐらい前から、歩くのも不自由になり、耳はますます遠くなっていた。若い頃からの重労働つづきで、老いるのが早かった。家族には無干渉・無関心というよりは、一人の世界に閉じこもっていたかの感があった。

そして、七六年一二月三〇日午前二時に、息を引取った。立派な体格だったが、棺に納められた遺体は小さく枯れていた。たが骨上げすると、実に骨太で、しかも壺に二杯分以上あった。著で突き砕いてやっと納めたほどであった。

権勢におもねず、名を売り金や地位を得ることをこころよしとせず、多くの人々を愛し、真剣に地道なアナキズム運動に徹した。兄弟や同志から「熊さん、熊さん」と敬愛されて、彼はこの世を去った。

―文中、敬称と敬語を省いたことをお詫し、心から水沼熊氏のごめいふくをお祈り申上げる。元旦記―

一波万波

◈先月号にのせた大杉栄らの「死因鑑定書」について、思ったより大きな反響がありました。

「たいへん貴重な資料を見せていただき喜んでおります。……」（N・Kさん）

「大杉の死因鑑定書は往時の官憲の残忍さをまざまざと露呈したものであり、今さらのように大杉の生前の容貌などをたぶって思い浮べ、感無量なるものがあります……。」（中沢輝夫さん）

「新年を迎えご健勝を祈ります

…ご送本ありがとうございました。安田医師の先輩田中軍医が大震災直後の夜はローソクを灯すような状況下で要所要所を見落すところなく剖検し、立派な鑑定書を作りましたことにはまことに敬服いたしました。

…「リベルテール」によりバクーニンの名を思い出しました。父がバクーニンの油画額をかけ、また愛犬にバクと名づけていた私の少年時代を思い出します。」（守田文彦さん）

「リベルテール十一月号を十二月二日に受けとり、一日に「石川さんをしのぶ会」が催されたことを知って残念に思いました。

昭和五・六年頃でっしゃろか　ルンペン生活を送るなかで石川さんの小屋に寝泊りして裏の麦畑をたがやしたり「ディナミック」の発送を手伝ったりしたことを思い出します。岩佐老人や近藤（こんけん）さんも時々来られて、往時の武勇伝を聞かされました。石川さんが亡くなられて二十年、温顔が思い出されます。私も来年は七三才の孤老、やがての安楽死を待つ心境です。中学時代の先輩、松尾邦之助さんも二年程前に亡くなられました。身辺旧知ぽつりぽつりと消えてゆかれますが、生物の宿命さけがたしと感ずる次第です。アナーキズム―思想としては解りますがアナーキーの社会の実現となると心もとなくなります。自分個人としては余生数年と観じて、なるようになれと感じている次第です。（太田勇平さん）

◈岐阜県の柏木隆法さんからは、「鑑定書の復刻には小生心が痛みました」という感想とともに、ご自身の記事ののった『朝日ジャーナル』（76年8月13日～20日「天皇と日本人」特集号）からのコピーをいただきました。偶然にも、今月号の表紙の版画を送っていただいた「黒痴社」の中島康允さんの紹介がとなりにのっているので併せてここに収録します。

…ところで、天皇問題となると理性も論理もとかくかきけされがちな日本の風土の中で、どのような人たちがどのような背景の下に、どのような形をとって「天皇」意識から抜け出ていくのであろうか。

熊本県荒尾市に住む画材商の中島康允さん（五四）は、戦前右翼グループに所属していたが、その時の心の軌跡を追い、自分自身を追及していく中で、天皇の戦争責任を問わざるをえなくなっていった。敗戦まぎわ、中島さんたちは「沖縄を蹂躙した米軍は、やがて本土に上陸するだろう。大都市は焼き払われ、内地にはもう食糧はいくらもない。最悪の場合、米軍と直接斬り合わねばならなくなる。その前に戦闘力にならない年寄りや子どもは、死なせておいて心おきなくやろう」と相談していたという。実際には、話だけに終ったものの、中島さんはそのことにこだわりつづけている。

中島さんは、昨年『遺言』というミニコミ誌を発刊した。天皇の戦争責任の追及がテーマである。

元ジャーナリストの柏木隆法さん（二八）は、大学時代に二日二晩、友人とぶっつづけに議論した果てに、

天皇制度が敵対物に見えてきたという。応援団長をつとめ、部屋の入り口に天皇、皇后の写真を飾り、一礼して入室すべしという規則を自分で作っていたほどの天皇崇敬者が、一転して反天皇主義となった。

この〝転回〟は、大杉栄らを殺害した甘粕正彦憲兵大尉が彼の親類筋に当たるという個人的な事情が、少年時代から一種の心の痛みになっていたこととも無関係ではなかろう。

彼は昨年、郷里の関西地方で反天皇制講演会を開いたが、今年に入ってからは、大逆事件で死刑台に送られた禅僧内山愚童の研究にとりかかり、先ごろ〝明治の腹腹時計〟と異名のあった幻のパンフレット『赤旗記念無政府共産』の復刻版を自家出版した。愚童が自分で印刷し、ひそかに同志に送ったもののうち一部だけが残されていたのである。皇室を尊崇するいわれのないことを説いたものだが、いま読んでみてもふるえがくるほどの衝撃的な文章である。

また、今年六月に発足した「久米島訴訟を支える会」のメンバーとして活発な活動をつづけている。三一年前、日本敗戦の日の前後に「皇軍」によって沖縄県久米島の住民二〇人（在日朝鮮人の家族七人を含む）が虐殺されたことは、本土でも知られるようになってきたが、「支える会」は、その遺族への国家賠償と謝罪を要求する訴訟を起こそうというのである。

獄中で闘っている江川允通さんからつぎの「たより」がありました。

度々、リベルテールの御恵贈を頂いておりますのに御存知の理由で御礼も差上げられませず心苦しく存じております。

リベルテール誌上に再度にわたって私についての記事と、救援の呼びかけを御載せ下さいましたことを衷心より深謝申上げます。

また、シカゴの御旅行記を興味深く拝見、昔を偲んでいます。

向井さんたちまで被害者にする権力の悪虐さは言語道断です。十二月六日の私の公判には、暴力裁判所は手ぐすね引いて待ち構え、理由にならない理由で傍聴人に襲いかかってきました。私に対する攻撃も、アナキストだということにこじつけて、いわれもない苦痛を加えよう（保釈拒否・無実の罪に重刑）としています。

権力は、アナキズムの本一冊読みもしないで、アナキストのレッテルさえ貼りつけられれば、それを口実に弾圧しようとしています。代々木や革マルや中核のように大きな組織となると手が出せないので、RGのような孤立した小組織となると、組織に加わったことがあるというだけで弾圧しようとしていることを皆様によく見て頂きたいものです。

歳も暮れゆく折、いよいよ御清健にて、よい年をお迎え遊ばされますよう。乱筆にて御免下さい。

1976－12－24